

# かがわ県産広葉樹と檜の物語

第二話







## はじめに

冬の空にアベマキが立つ。  
幾重にも重なった梢が、  
灰色のキャンバスを刻み、  
ステンドガラスの欠片となって舞う。  
西風に太くて硬い幹がうねり、  
軋みが重い天籟となって響く。  
やがて春が来れば新緑が萌え、  
夏の樹液は昆虫の集う酒場となり、  
秋の堅果は生き物たちの糧となる。  
この一本のアベマキには、  
様々な生命が織りなす、  
たくさんの物語がつながっている。

Story I

# 「里山広葉樹林業」への挑戦



## 広葉樹の森

広葉樹の森の多くは、コナラやアベマキ、クヌギなど、どんぐりがなる木で構成されています。

どんぐりの木は「薪たきぎにしかない木」と言われています。山で椎茸しいたけが作られなくなった頃から、そう言われるようになりました。

しかし、最近、これらの木を使って家具を作る取り組みが注目されています。



## 伐採・玉切り

広葉樹の伐採は簡単ではありません。

枝や葉が大きく広がり、幹も曲がったりねじれたりしているため、どの方向に倒すかをよく考える必要があります。

大きな木ばかりではありません。少し細い木でも、できるだけ家具の材料として使えるように玉切りしいたけします。残った木も、椎茸しいたけの原木や薪たきぎ、チップ材として活用します。



## 製材

広葉樹はとても硬い木です。

製材所にとっては手間がかかり、扱いが難しい木ですが、少しでも良い板をとるために、一番良い方向を見極めて、のこぎりを入れます。

その瞬間、工場の中に甘い香りが広がります。

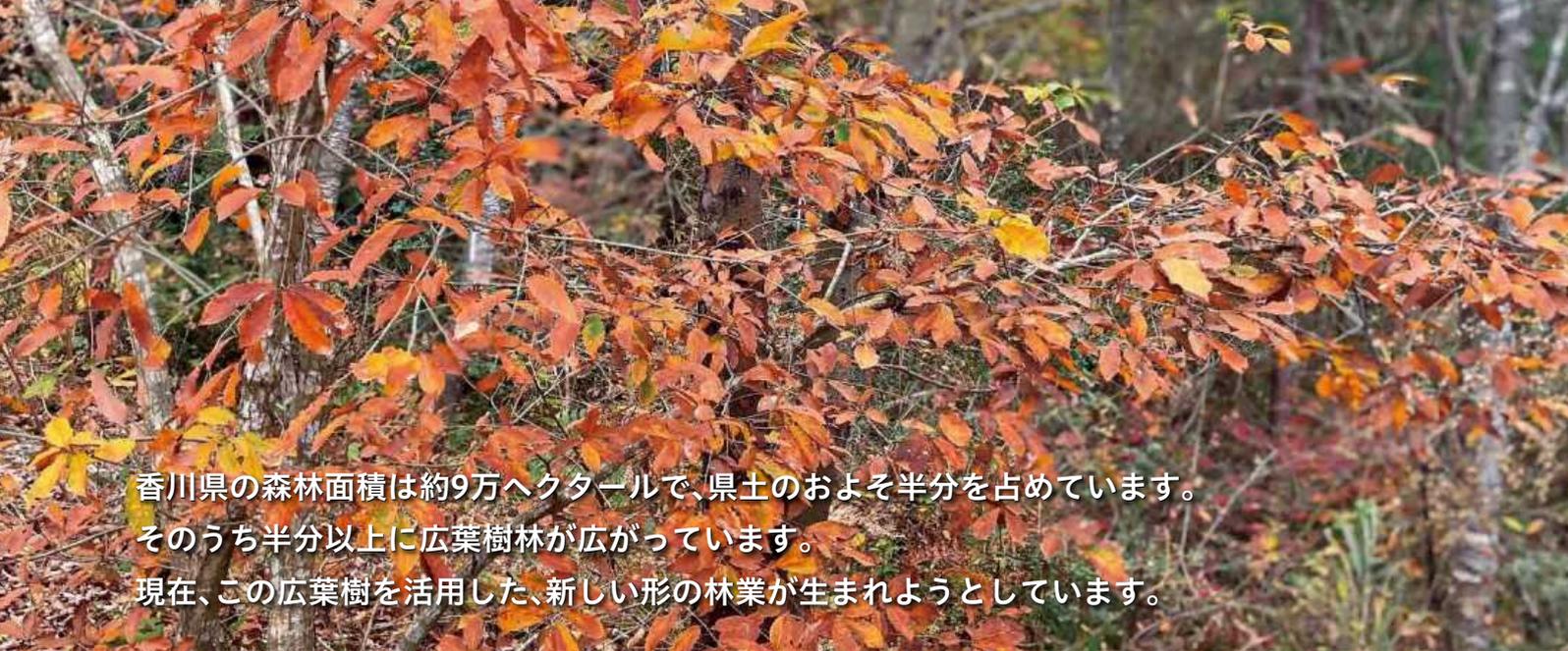


## 天然乾燥

板は、乾燥させなければ使うことができません。

積みきんづみしてゆっくりと乾かす「天然乾燥」は大切な工程です。しかし、乾燥することで、板は反り返ったり、割れたり、ときにはへこんだりします。

板のご機嫌を伺いながら、木口の割れには「かすがい」を入れ、割れが広がらないように注意して乾かしていきます。



香川県の森林面積は約9万ヘクタールで、県土のおよそ半分を占めています。  
そのうち半分以上に広葉樹林が広がっています。  
現在、この広葉樹を活用した、新しい形の林業が生まれようとしています。



## 人工乾燥

広葉樹は本当に乾きにくい木です。  
天然乾燥だけでは含水率<sup>がんすいりつ</sup>を十分に下げることができません。  
大きな釜の中に入れて、蒸気と熱を使って人工乾燥を行います。こうすることで、材の奥まで均一に乾かすことができ、家具にしたときの反りや狂い<sup>くる</sup>が少なくなります。



## 加工(木取り)

コナラやアバマキ<sup>まさめ</sup>の柁目材<sup>とらふ</sup>に現れる美しい虎斑模様。  
長い時間をかけて材を大切に扱ってきた苦勞が、一瞬で報われる瞬間です。  
納得のいく木目が出るまで、何度も何度もカンナをかけます。木と正面から向き合える至福の時間です。



## 里山の木が家具になる

木目の個性が強い板を一枚一枚はぎ合わせる工程。  
木と語り合う最後の時間です。「これしかない」という組み合わせの天板になるまで、何度も試行錯誤を繰り返します。  
こうして、世界に一つだけの香川県産広葉樹のテーブルが完成します。



## 森は再生する

しかし、物語はまだ終わりません。  
春になると、伐採された広葉樹の切り株から、たくさんの新しい芽が伸びてきます。  
この仕組みは、年輪を重ねて老い始めた森が、人の手によって活用されることで、再び若返るという大切な循環です。  
勢いのある芽を数本残して仕立てることで、森の再生を助けることができます。

# 「じいちゃんが植えた木の家」



## ヒノキ林の中のじいちゃん

もう半世紀以上前の話になります。

春になると山の斜面が一面ピンク色に染まり、それは美しい眺めの桃畑でした。

いつしか桃の栽培は終わり、その後に私の父がヒノキを植えました。定年になった私の父が森の手入れをしていた姿を、私は傍らで長い間見ていました。



## 伐採前のヒノキ林

時は流れ、今は亡き父が残してくれたヒノキ林は、家が一軒建つほど大きく育ちました。

家族を持った息子への、祖父と私からの贈り物になればと願いながら、家づくりを始めました。



## 伐採と搬出

森林作業道を入れ、伐採と搬出が始まりました。

植えた頃から父と一緒にこのヒノキ林を育ててきました。

これまでの一つひとつの作業が走馬灯のように思い出されました。



## 玉切り(採材)

収穫したヒノキ材は、合計で1,056本、材積は116立方メートルとなりました。

長さ5メートルの通直な材は14本のみでしたが、4メートル材が242本、3メートル材が484本、一軒家を建てるには十分な収穫です。



「祖父が植えたヒノキを、孫が収穫し、家を建てる。」  
夢のような話だと思っていましたが、本当に実現した家づくりです。  
単なる地産地消にとどまらず、思いを受け継ぐことの大切さを伝えてくれる  
物語として紹介します(取材時の施主様の説明を参考にまとめました)。



## 土場に積まれた丸太

土場に積み上げられた材を見ながら、わずかな土地に植えたヒノキが、これほど多く収穫できたことに驚きました。

これから製材所へ運ばれ、丸太は材木へと加工されていきます。

息子と一緒に木を眺めながら、これからのことを思い描くひとときとなりました。



## 天然乾燥

製材後の乾燥は迷うことなく天然乾燥を選びました。

一年間かけて、ゆっくりと乾燥するのを待ちました。

予想していたとおり、木材は淡いピンク色で、きめ細かく、やわらかい木肌に仕上がりました。



## 完成

完成した家の中で目を閉じると、私の脳裏には父が育てたヒノキ林の深い緑がぼんやりと浮かんで消えます。

両親と弟と四人で山仕事や畑仕事に精を出していた頃の思い出が、その風景に重なります。



## 新しく植えられ、育つヒノキ

新しく植えたヒノキは、しっかりと根付き、順調に成長し始めているようです。

残念ながら、このヒノキが大きく育ち、再び家の材料となる姿を、私はもう見ることはありません。

しかし、何十年か後に、私の孫やひ孫の家になると考えれば、猛暑の中での下草刈りも苦にはなりません。



## ■ 写真提供・協力

香川県家具商工業協同組合  
有限会社 かがわ木材加工センター  
桑島林産工業株式会社  
澤木 譲  
西尾 和良  
増田 孝夫  
松原 雅裕

(50音順敬称 略)

## かがわ県産広葉樹と檜の物語 第二話

令和8年3月

編集・発行 香川県

